

e-dream-s通信

e-dream-s ホームページ <http://www.e-dream-s.org>

No.33 発行：2003年4月13日特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

1. 銀河合衆国 辻莊一
2. アメリカ帰りの客観：Global Cultural DNA 井川好二
3. “5足の草鞋”～NPO初体験～ 中川房代
4. カメルーン教育事情（その3） 山田昌子
5. 韓国打ち合わせツアーを終えて 藤澤俊之
6. 韓国随記 辻岡尚子
7. ECAP 2003 Korea 東京支部学習会報告 岡田かおる
8. “チャータースクールツアー2003” 帰国報告 中川房代



ソウル市内焼肉店「南山カルビ」にて、ECAP について韓国側の先生方と打ち合わせ。前列左より、Young Hee 先生と辻岡さん。後列、左より3番目が、チェ指導主事、その横が、李 龍宰先生

<チャータースクールツアー>



Community Academy of Philadelphia の授業の様子 中央の男性は、校長の Mr. Joseph Proietta



CCSの前で 参加者7名と校長の Mr. Bill Winters(前列左), Director of Administrative Servicesの Ms. Beth Jones (最上列右), 理事会長の Mrs. Lynne Alfonsi(中央列)

銀河合衆国

辻莊一

いわゆるSFにあまり興味のない人でもスタートレック¹というテレビドラマはご存じだろう。カーク船長率いる宇宙船エンタープライズ号が星々を巡り様々な冒険をするというSFドラマである。最初の放送は30年以上も前のことだ。



トラクタービームやワープといったSF設定、格好いい宇宙船のデザイン、一話完結の波乱に満ちたエピソードは当時SF少年だった私をのめり込ませるに十分だった。なによりも夢のような未来を描いているように思えた。あるファンサイト²の運営者は

スタートレックでは理想的な未来を表現しようとしているところが随所に見られます。たとえば、貧困がないとか、お金というものは存在しないとか、何よりも戦争という点に対して、否定的というか、懐疑的というかとにかく、戦争は問題の解決にならないという主張が見られます。そういう点をもちながらも、物語として素晴らしいものです。(説教臭さはありません)

と書いているが、これは当時私がスタートレックに抱いていたイメージとほぼ同じだ。

人気番組なので何度も再放送されていて、さすがにのめり込んでいるわけではないが深夜何となく見ることも多い。そして大人となった眼でみると「スタートレックって、なんてアメリカンなんだ!」と思ってしまうのである。

エンタープライズ号の乗組員は一応地球人代表と言うことになっているが、もちろん全員英語を喋る。英語を喋るだけでなく、立ち居振る舞いや考え方・感じ方がみんなアメリカ人だ。脚本家も俳優もアメリカ人なんだから当たり前といえば当たり前だ。さらに主な登場人物の構成を見てみよう。

熱血漢のカーク船長(地球人・白人)

冷静沈着な副長のスポック(地球人とバルカン星人のハーフ)

¹アメリカで1966年から68年にアメリカで制作され、その後日本でも放送された。その後、新シリーズ、映画が次々と作られ、現在もトレッキアンと呼ばれる多数の熱烈なファンがいる。

² <http://www2s.biglobe.ne.jp/~Sato/index.html>

頑固な船医ドクターマッコイ（地球人・白人）
操舵手のスルー（地球人・東洋人）
ブリッジ要員チェコフ（地球人・ロシア人）
通信担当のウフーラ³（地球人・黒人女性）
機関長のモンゴメリスコット（地球人・白人）

これを様々な人種が仲良く生活している理想的な未来と見ることもできるし、制作者側はそう思っていたはずだ。しかしよく見れば理想とはほど遠い。半分宇宙人のスポックを除くと一番偉くて尊敬されているのが白人のカーク船長とドクターマッコイ、ロシア人は一応白人なのでブリッジ要員だが、東洋人のスルーは操舵手、黒人のウフーラは通信担当だ。つまり言われたとおりに動くだけの任務だ。順調な航海に欠かせない機関長はやはり白人だ。白人は白人でもブアホワイトだろうけど。

これは正に、当時のアメリカの社会階層に当時対立していたソビエト連邦の人間を加えたものだ。つまり宿敵ソ連亡き後の「理想世界」が実現しているのである。もちろん理想は理想でもアメリカ白人⁴の考える理想だ。いわゆるワズプが社会の実権を握り、その他の人種は下働きだ。さらに人種は違っても考え方や立ち居振る舞いはアメリカ人だ。つまり文化的には皆アメリカ人になっている。

このドラマの敵役はクリンゴン星人などの戦闘的で凶悪な宇宙人だが新シリーズや新作の映画を見ると彼らもいつの間にか平和的になってアメリカ化している。彼らを現代社会で例えるならイラク人だろう。イラクでの戦争も終結に向かっているが、アメリカの考える戦後の理想世界は、クリンゴン星人のようにイラク人もアメリカ人のように考えアメリカ人のように行動するようになり、アメリカ社会の下働きの地位を与えられるというものだろう。

現実のアメリカは階層社会だ。社会の実権は白人が握っている。下働きをしているのは黒人でありラティーノである。アメリカはその現実から理想へ進んでいるという。公式見解によればその理想はどの人種も平等で誰にでもチャンスが与えられる多文化社会だ。しかしこのドラマに出てくる理想社会、つまり公式見解でない本音のアメリカの理想社会は白人優位・アメリカ文化一人勝ちの世界のように見えるのである。

³ 当時テレビに映る黒人女性といえばメイドと相場が決まっていた。黒人女優ウーピー・ゴールドバーグは、通信士を務めるウフーラを見て黒人女性でもメイド以外の職業に就けるんだと分かって驚喜した、と述べている。

⁴ 新シリーズでは女性艦長が登場するがやはり白人だ。

現実の世界はスタートレックの世界のように単純ではない。アメリカの理想を信じるものばかりではないし、文化を奪われたものには怨みが残る。しかしアメリカ人の考え方は30年前に放送されたスタートレックの理想から一歩も進んでいないように見える。そしてこの独りよがりの善意に満ちた人々を止める力は世界のどこにもないのである。

e-dream-s.come.true

アメリカ帰りの客観：Global Cultural DNA

井川 好二

京筍の木の芽和え⁵に、たらの芽⁶と落の薑⁷の天ぷらが、カウンターに並ぶと、急に春らしく、その淡い緑の彩りに、何となく和んだ気持ちになれるのは、やはり日本人としての Cultural DNA のおかげか？ 備前⁸の花瓶に、抛入れ⁹の菜の花が明るい。

遺伝学などで云われる DNA(デオキシリボ核酸)¹⁰が、先天的なものであるのに対して、文化的アイデンティティを構成する Cultural DNA は、後天的に獲得される形質と考えられる。ある文化に包まれて、一定期間育ったり生活したりすると、その文化が持つ理念、価値観、思考方法、表現方法などが、意識的および無意識的に、広範に肉体と精神へ浸透し、文化的アイデンティティとしてその個体に定着する。これを、Cultural DNA と云い、時に内外の刺激に反応して、激しくあるいはマイルドに発現する。

⁵ 山椒の芽に味噌や砂糖などをすりませ、イカ・タコ・タケノコなどを和えた料理。[広辞苑第五版図版付き]

⁶ 春にタラノキの先端に出る若芽。食用。[広辞苑第五版図版付き]

⁷ 春の初めに落の根茎から生え出る花茎。ふきのじい。ふきのしゅうとめ。[広辞苑第五版図版付き]

⁸ 備前焼【びぜんやき】中世以来、岡山県備前市を中心として焼かれている陶器の総称。製品は壺・甕・播鉢などを主とし、室町後期には信楽焼とともに茶陶を最も早く焼いたことで知られる。備前窯はもともと須恵器窯の流れをうけており、初期の作品は灰色であったが、中世には備前焼独特の赤褐色へと変化した。[岩波日本史辞典]

⁹ 抛入れ【なげいれ】いけばなの様式の一つ。正式の書院飾りの様式である立花(りっか)に対して、一定の花型をもたず、自由に挿されたもの。[岩波日本史辞典]

¹⁰ デオキシ リボかくさん【-核酸】(deoxyribonucleic acid) 5 炭糖の一種デオキシリボースを含む核酸。細胞核内の染色体の重要成分。遺伝子の本体として遺伝情報の保存・複製に関与、リボ核酸と共に、生体の種や組織に固有の蛋白質合成を支配する。DNA と略称。[広辞苑第五版図版付き]

「もうすっかり春どすな」

「うん、そうや」

「こないだまで、あないに寒い寒い云うてたのに、こんな暖かになって」

「当たり前や、もう4月やで」

「けど、センセ、自然に感謝の気持ち持たんとあきませんよ。春になったお陰で、また、美味しいもの食べれるんですからね」

「そやな、春は、野菜も、魚も旨い。けど、冬に旨いもんあるで」

「もう、また、そんな憎まれ口！」

やがて、亀甲緋が浮き出た渋い茶色の結城¹¹を着たママが、「お待ちどうさま」と、運んで来たのは、桜色の輝いて見える真鯛の刺身で、「今日は、四国の来島¹²から鯛の工工のが、入りました」と、日本の春は、眼にも舌にも嬉しい季節である。

「アメリカは、どないでした、センセ？」

「どない云うても、別に、何ともなかった」

「けど、皆さん、心配したはりましたよ」

戦時のアメリカから帰ってみると、日本は、桜の花ざかりであった。野も山も、公園も庭も、一斉に霞がかかったような桜色に変わる。そう言えば、フィラデルフィアの Penn's Landing¹³ でも、ちょうど桜が咲いていた。

もっとも、アメリカの桜は、花が総体に、白すぎるか、赤すぎるかして、日本の桜の、あわあわとした微妙な色合いが感じられない。あるいは、例えば、「京鹿子娘道成寺¹⁴」

¹¹ 結城付近から産する絹織物。木藍で染めた細い細糸で織り地質堅牢。緋かすりまたは縞織。結城。[広辞苑第五版図版付き]

¹² くるしま かいきょう【来島海峡】愛媛県今治市の高縄半島と芸予諸島の島との間にある水道。燧灘(ひうちなだ)と安芸灘を結ぶ要路だが、潮流が急で、瀬戸内海有数の難所。[広辞苑第五版図版付き] 地元のHPには『来島海峡の真鯛来島海峡の真鯛は明石の鯛と並び、全国的に有名。どちらも潮が早く、水温の差が激しい海で育った鯛だ。藩政時代、今治藩には「鯛奉行」が置かれ、幕府に献上していたと伝えられているほど』とある。http://www.kurushima.co.jp/kai/z_madai.htm

¹³ Penn's Landing Marina: n. ペンズランディングマリーナ 《Philadelphia の地名; 1682 年 William Penn がイングランドからやって来て最初に上陸した地点で、最初の合衆国造船所があった所》[リーダーズ+プラスV2]

¹⁴ 舞踊・邦楽曲の一系統。[広辞苑第五版図版付き]「桜の満開の道成寺の鐘の供養の日に、美しい白拍子、花子が現れ、鐘を拜ませて欲しいという花子に、坊主たちは舞を所望します。花子は烏帽子を付けて舞ったあと、娘の恋の姿をさまざまに踊ります。そのうちに隙を見て花子は鐘の中に消えていきます。鐘を引き上げてみるとでてきたのは恐ろしい蛇体。白拍子は実はかつて鐘の中に隠れた男を恨んで蛇体となり鐘ごと焼殺した清姫の亡霊でありました。」

<http://www003.upp.so-net.ne.jp/sei0720/kabuki/doujouji.html>

の舞台のように、狂気を誘う桜花爛漫の世界は、アメリカの桜風景にはない。一概に、木の種類や土壌や風土の違いだけではなくて、日本の春の空気が持つ、繊細過ぎる気まぐれが、アメリカにはないからとも考えられる。

「アメリカでも、戦争って、テレビの中だけや」

「日本と一緒にすね」

「人はいっぱい死んでいくけど、どこの世界のことって感じ」

時々刻々、テレビはイラクでの戦況を伝えるが、日本でも、アメリカでも、そのリアリティは、ブラウン管の外に出るものではない。CNNは、バクダッドの空爆の様を、生々しく、出来るだけセンセーショナルに伝え、人々はその時少しだけ憂鬱な気持ちになるが、やがて世界は何事もなかったように動きだし、生活は、今日も昨日と少しも変わらず繰り返されていく。蓋し、Postmanが云うように、現代は、意味のない情報に溢れているのである¹⁵。

「日本も、だんだんアメリカみたいに、なっていくんですやるか？」

「そうとも云えるし、そうでないとも云える」

「日本とアメリカって、違うところもいろいろありますやる」

「アメリカは、正義の国」

「あのイラクの戦争が、正義ですか？」

「そやなしに、国が一旦これが正義と決めたら、それに皆で燃え上がる国や」

「へえ、だから、『正義の国』どすか」

「そう、正義好きの国や」

アメリカと云う国について、司馬遼太郎は、

無意味なほどに“正義”で昂揚する社会であることがわかる。(『ニューヨーク散歩』
¹⁶p. 85)

と云う。そう云えば、今回のイラク戦争も、先の太平洋戦争も、アメリカにとっては同様に、正義の戦いである。肥満の克服も、禁煙運動も、奴隷解放も、エクセサイズ

¹⁵ “Information is now a commodity that can be bought and sold, or used as a form of entertainment, or worn like a garment to enhance one's status. It comes indiscriminately, directed at no one in particular, disconnected from usefulness; we are glutted with information, drowning in information, have no control over it, don't know what to do with it.” Neil Postman *Informing Ourselves To Death*. Speech was given at a meeting of the German Informatics Society (Gesellschaft fuer Informatik) on October 11, 1990 in Stuttgart, sponsored by IBM-Germany.

¹⁶ 司馬遼太郎(1997)『街道をゆく 39：ニューヨーク散歩』東京：朝日文庫。

も同様。アメリカ社会は、無意味なほどに、正義に昂揚する。冷戦後、そのアメリカが、世界で唯一の Super Power となった。アメリカの正義は、世界の正義になった。

「日本は違いますか？」

「そう。そういう、黒か白か云う燃え上がり方は、せえへん」

「太平洋戦争の時は、そうやったんやないですか？」

「かも知れん。けど、冷静になってみれば、そんなんアホらしい思う気持ち
が、日本の正気」

「アメリカは、正気で燃える」

「そう」

表層的には、世界中がアメリカ化している。情報化社会、消費社会、グローバル社会、エンターテインメント社会。日本や中国だけでなく、イラクも北朝鮮も、急速にアメリカ化しているのである。

その一方で、日本がアメリカに決して同一化しないように、変わらない世界も存在する。アメリカの中にも、「アメリカ化」しないアメリカがある。しかし、その変わらない要素を、あるいは、その多様性を、「文明の衝突¹⁷」へ、ではなく、文明の共存へと、世界を導く牽引力にしなければならない。あるいは、地球の未来のために、そうすることが、現代に生きるものの義務である。

「エエもんは残るやろ」

「分かる人が居たはったら」

「アメリカにも、エエところは、いっぱいある」

「そうどすなあ。けど、テレビだけ見とったら、分かりませんね」

「そやから、現場へ行って、自分の眼で見んと。自分で匂い嗅がんと」

「ほんまに」

「分かる人間を育てるこっちゃ」

司馬は、小学校 6 年生用の教科書の中で、「自然へのすなおな態度」が、21 世紀の希望であると、書いている。

¹⁷ 文明の衝突(clash of civilizations) [世界政治] 文明の衝突とは、ポスト冷戦期の世界政治は、イデオロギーや国家にかわって、文明を単位とした勢力間の対立を軸に再編されるという主張。アメリカの政治学者 S・ハンチントンが同名の論文(1993年)と著作(96年)で提唱。[現代用語の基礎知識 2002年版]

そうならば、21 世紀の人間は、よりいっそう自然を尊敬することになるだろう。そして、自然の一部である人間どうしについても、前世紀にもまして尊敬しあうようになるのにちがいない。そのようになることが、君たちへの私の期待でもある。(司馬遼太郎「21 世紀に生きる君たちへ」p.12¹⁸)

そういう世界観を具現することが、教育で世界を変えることを目指す NPO の、理念のひとつである。そして、そういう Global Cultural DNA を、世界に伝播することが、e-dream-s の大きな使命のひとつである。

「今回は、時差ボケが酷うて」

「あら、いつもは、そんなこと余り気にしはらへんのに」

「夜中、変な時間に眼覚めて、寝られんで、困る」

「やっぱり、お歳？」

「放っといってくれ。未だ若い！」

「そうです。しはらんとアカンこと、いっぱいありますもんね」

(Saturday, April 12, 2003)

“5 足の草鞋” ~ NPO 初体験 ~

中 川 房 代

「NPO でライフプラン・ワークプラン ~ 起業・運営、現場からのチャレンジレポート ~」(主催：大阪 NPO センター、運営：NPO Graduate School) という 3 回シリーズのセミナーがあり、第 1 回のスピーカーを依頼された。自分のためにもなり e-dream-s の広報活動の一環にもなると思い、引き受けた。

4 月 5 日にそのセミナーがあり、約 1 時間、自分の体験談と e-dream-s の活動紹介をしてきた。

普段学校の仕事の中で授業や集会で話をすることはあるが、今回のように、初対面の人たちに自分のことをそれも 1 時間も語る機会や経験は今までなかった。どんな人が集まってくるのか(誰も来てくれなかったらどうしよう?)、どんなことに興味がある

¹⁸ 司馬遼太郎(1999)「21 世紀に生きる君たちへ」東京：朝日出版。初出：大阪書籍「小学国語 6 年下」)

のか、どんな話をすればいいのか。いろいろ考えた末、私が参加者なら聞きたいと思うことを話すことに決めた。それで、1つのケーススタディとして私がNPO活動を始めた動機ときっかけ、活動の中で感じたことや考えたこと、これからしたいことを中心に話し、その中でe-dream-sの活動紹介(@aglanceの紹介とチャータースクールツアーの写真のスライドショー)をコンピューターとプロジェクターを使って見せることにした。

さて、集まったのは15名。そのうち女性が5分の4。年齢層でいうと、30代から50代前半がほとんどで、あと大学生と退職前後の世代が少し。テーマや設定する曜日や時間帯によっても少しずつ違うのだそうだが、私の感覚では、セミナーなどに参加してNPOを始めたいのは女性に多く、男性では退職後の新たな仕事を求めている人が多いのではないと思う。顔書きメモをとりながら熱心に話を聞いてくださる参加者を前に、緊張の1時間であった。

話の後、質疑応答の時間があった。質問の内容は、法律の運用などの実務的なこと以外では、「NPOで食べていけるのか」と「職業を持ちながらNPO活動はできるのか」という“お金”と“時間”に関わるものがほとんどであった。お金についての私の回答は、NPOを始めた当初はお金についてあまり深く考えず、今になってやっとその重要性に気づいてきたこと、NPOといえども事業のビジネス的な要素をしっかりとっていないといけないこと、それが現在の私の組織の課題の一つであると認識していることを話した。

時間については、“3足の草鞋(わらじ)”の話をした。“3足の草鞋賞”は、3月にNPO大学院講座の修了式で私が頂いた賞の名である。“教師の仕事、NPO活動、NPO大学院講座受講生の3つを両立させて頑張ったで賞”ということなのだが、これら3つに、英語教師の研究会ACROSSの会員と妻(主婦とは言えない!)を加えて、本当は“5足の草鞋”なのだと言ったら、参加者から更にビックリされた。何でもそうだが、「時間があれば(こうするのに)...」と聞いていたらいつまで経ってもできない(ことが多い)。私は、やりたい、やろうと思った時が、自分の一番の適時だと思っているし、思うことにしている。「今は忙しいから...」と躊躇を感じる時は、もしかしたらまだ適時ではないのかもしれない。時間の調整ができるのだろうかと気になることもあるが、人間したいことはするもので、優先順位が多少変化するだけのことではないかと最近思っている。たくさんの草鞋を履きながらその時々や場面でそのバランスをとっていくことも大事だと思う。やりたいことは逃したくないという欲張りの本性も影響しているのかもしれないが...。そんな話をした。

私の言いたいことをどこまで伝えることができたのかはよくわからないが、参加者の

中で、在日外国人のための日本語教室をしている人に @aglance のオンデマンド日本写真へのリクエストもお願いしたり、大学生でコンピューターに関わる活動をしている人には、@aglance に興味を持って頂いたりもしたようである。セミナーの後、写真の提供を申し出てくれる人もあり、e-dream-s のよい宣伝の機会にもなったかなと思っている。

「明るい顔で、明るい声で、明るい話を」とよく言われる。最近、教師の以外の世界や海外に出る機会も増え、相手やその場に適した服装や外見、パフォーマンス、伝え方のテクニックの重要性を感じるようになってきた。NPO に関わる者としても、協力者を募り資金提供を求めていく上でも、相手にプロジェクトの内容を伝え、自分の体験や思いをどう伝えるのか、内容の整理は勿論だが、パフォーマンスの点でも、工夫と努力に加えて場数を踏むことも大事だと思う。今後もこういう機会に積極的に参加していきたいと思っている。

カメルーン教育事情(その3)

e-dream-s 理事 山田昌子

新学期が始まった。桜の花が咲き誇り、新しい年度の始まりを祝っているようだ。刷り上がったばかりのインクの臭う新しい教科書を手にとると、生徒のみならず、教員も「さあ、今年は頑張るぞ!」という気持ちになるから不思議だ。授業であれもしよう、これもしようと頭の中でアイデアを練る。と同時に、英語教師として、例年以上に今年は研修に力をいれなくては!と襟を正す。真っ白なキャンパスにデッサンをし、色を塗る楽しみ、そしてうまく描けるかな?という緊張感もある。



カメルーンの新年度は、9月に始まり、6月に終わる。欧米と同じだ。今年1月2日(木)首都ヤウンデにある、College Prive Laic Fleming (LCF)を訪れた時、私は新学期に感じるような新鮮な面持ちと緊張感を覚えた。出迎えて下さった校長先生は、ライトブラウンのツーピースを着た、とても優しくそうな女性の先生だった。1991年女子教育に力をいれたいと私立の女子セカンダリースクールを作られたとは思えない程、この女校長は優しく見えた。それまで数日間しかカメルーンに滞在していなかったが、ホストや様々な教育関係者と話し、カメルーンが男性中心の社会であると理解していたので、その女校長が、例えば銀行でお金を借りるにも随分苦労があったらうということは、容易に想像できた。成果を上げなければ学校がつぶれるという現実を前にして、創立以来、少しずつ成果を上げ、生徒も集まるようになったそうだ。その後、男女共学にし、現在では文系・理系合わせて14クラス、496名の生徒数がある。1教室の中で55名の生徒が学べるようにし(カメルーンでは70名/教室が普通)、2年前には、生徒全員が大学に進学した。カメルーンで100%の成果をあげることは並み大抵のことではない。話をしながら、女校長の笑顔にある深い皺を見ていると、その努力の大きさがわかるような気がした。横で、彼女の孫である小さな女の子が寝息をたてていた。

校長の話では、カメルーンでも、遅刻、授業のさぼり、授業妨害、宿題をして来ない、盗み、体育の授業の拒否などが、生徒指導上の問題となっているようだ。例えば、授業は7時30分に始まるが、45分には校門を締めることになっている。それ以降に登校した生徒は自動的に欠席となるようだ。それぞれの問題は、生徒が持つ指導ノートに記録され、保護者との連絡がかかさない。そして、問題事象により決まっている点が加算され、合計得点があまりに多いと、保護者が呼ばれる。盗みは、私の勤務校でも大きな問題となっているので、どのような対策をとっているのか尋ねてみた。盗みはそれ程多いわけではないが、ある時盗みが発覚し、盗みをはたらいた生徒の両親に教室に来てもらった時のことを例に話して下さった。両親は他の生

徒の前で、自分の子供がしたことを明らかにし、子供の頬をたたいたそうだ。それを聞いて、私はびっくりしてしまった。逆に、年度の終わりの6月は、頑張った生徒へ、賞状などの褒美も忘れないそうだ。



休みにもかかわらず私たちに会ってくださったのは、校長先生と、英語科主任のJ先生(女性)だった。J先生は、薄いベージュ色の民族衣装を身にまとい、頭に同系色の布を巻き、黙って横に座っておられた。布の繊細なレースと、片肩にかけた金色の糸の格子のある薄いショールのコンビネーションがとても眩しかった。「英語教育はどのようになされているのか？」尋ねてみると、笑顔を見せてくれたが、その唇の赤い色がとてもチャームングだった。彼女の英語教育への情熱を感じさせるような色だった。

各学年2クラスずつの14クラスのうち、英語教育をするのは7クラス。英語科の教員は5名。教科書は、カメルーン全土で同じものを使うが、オックスフォードなどイギリスの出版社のものを使うようだ(コースにより異なるものを使用)。年度当初に年間計画をたて、年度途中で教育省による研修や監査がある。監査では、授業準備、授業見学、見学後の3段階すべてに、指導がはいる。その指導内容は、すべてタイプし残される。この組織化されたシステムは、J先生によると、公立でも私立でも同じで、カメルーン全土で効果的な教授がなされるように管理されているらしい。

翌日訪問した MEVICK Bilingual College(私立のセカンダリースクール)でも監査について尋ねてみた。大学で授業を行う練習をするが、教職についた後、大学の先生が授業見学に来る。また、教育省からも見学に来られ、状況が良くなければ、特別なワークショップを受けなければいけない。それでも改善されない場合は、給料にもひびく。そういえば、J先生も、何度言っても良くならない教員は(特に私立の場合)首になると言っていた。

では、カメルーンの英語教育は何を目指しているのだろう。」先生は、早口で「教科書は、speaking, listening, reading, writing の4技能の習得、そしてコミュニケーションのための英語教育を目指して編集されているのよ。勿論、文法も大切にしているわよ。この語の名詞は何？ 形容詞は？とか、よく生徒に尋ねるわよ。文章を読んだ後に、文法を意識して文を書かせることもあるわ。例えば、He is going ...というように現在進行形に注目させたりするの。エッセイも書かせ、文法と生徒のアイデアと両方を重視しているの。私たちは、毎火曜の午後行われる研修で、イギリスの大学の先生から最新の教授法を勉強しているのよ。」と胸をはっておっしゃった。

「授業では英語をどんどん使うわ。ペアワークやグループワークも取り入れているわよ。宿題もたくさん出すわ。絵や写真、ニュース、雑誌などいろんなものを使って、生徒に英語を話させるように工夫しているわ。とにかく楽しい授業にしたいの。でも、生徒にいいかげんなことはさせないわ。間違った生徒に対して、別の生徒が笑ったりしたら、しっかり叱るわよ。」

「先生は、自分たちがしている英語教育について話す機会を与えられ、熱心に語り始めた。「水を得た魚」とはこのことか、と思わせる迫力だった。

「例えばね、ある教科書の Lesson 1 は『食物と栄養』っていう内容なんだけど、読むだけでなく、いろいろなことをしているの。エッセイを書かせ、それをもとに、グループ内で Young People in Danger というテーマで話し合わせ、その後クラス全体でディスカッションさせるの。グループでリーダーやセクレタリーを決め、得意な生徒が活躍できる場を与え、苦手な生徒に対しても、教え合いができるようにしているのよ。」

「この1月からスタートするんだけど、毎週月曜は、English Day にして、生徒たちが英語をしゃべる日にするの。英語のポスターを貼ったりして啓蒙するつもりよ。カメルーンも、これからは英語が重要になるからね。」

中川副代表理事も私も、彼女の熱っぽい語りに、すっかりひきこまれてしまった。英語を教えることを楽しんでいるんだなあとと思った。それにしても、日本と比較して暗い教室、見にくい黒板、(申し訳ないけれど)ほとんど何もないと言っても過言ではない設備で、こんなに熱く語れるなんて。私たちは、少なくとも教育設備においてはうんと恵まれているのに……。この違いは何なのだろうと思った。カメルーンの教育省を中心としたシステムが、体系的で組織的、悪く言えば十分管理的であることが、設備の不十分さを大きくカバーしているのかもしれないと思った。それにしても、少なくとも日本の教育委員会が実施する以上の研修が提供されているらしいのは、正直うらやましかった。その他、アメリカ文化センターやブリティッシュカウンシルで、

in-service training のワークショップが実施されてもいる (MEVICK Bilingual College の先生から伺った)。確かに、「先生は特別かもしれない。が、研修をして、それを授業実践し、うまくいっているかチェックする、そしてそれぞれの先生方が自信を深めているというシステムが、国レベル・学校レベルの両方で作られ実践されているとすれば、これはやはりすごいことだろう。そして、「先生のような元気な先生、が一杯頑張れる場があるということは、カメルーンの誇りと言えるだろう。カメルーンの予想だにできなかった一面を見た思いがした。

カメルーンから帰国して、3か月が過ぎた。私の家の庭の桜の木の廻りでは、春の変わりやすい天気、花びらが舞い始めている。新しい年度のはじめに感じたやる気と緊張感を、桜の花が散るように一瞬のはかないものにしないよう、精一杯頑張らなければならないと思う。あの女校長先生と「先生の笑顔が、桜の満開と重なって見えたような気がした。

韓国打ち合わせツアーを終えて

ECAP 実行委員 藤澤 俊之

4月3日(木)～5日(土)まで、この8月に行われる ECAP 韓国ツアーにおいて、中心的な活動となる日韓異文化理解教材作成セミナーの内容を、より具体的なものにするため、大阪の辻岡尚子さんと共に釜山、ソウルを訪れて来ました。

主な目的は、セミナーに参加していただく韓国側の先生の参加について、釜山市教育委員会、ソウル市教育委員会の関係者とお会いし協力を依頼するということでした。結果として、両教育委員会の指導主事にお会いすることができ、参加していただく先生方を推薦していただけることになりました。

3日に訪れた、釜山市教育委員会では、国際交流担当の李指導主事と話をすることができ、釜山の英語教師と日本語教師数名を紹介して下さることになりました。訪問に際しては、前回もお話しましたが、大阪でこの3月まで ALT をされていた、金 智賢(キム ジヒョン)さんが同行して下さり、今回の話しが、前進する非常に大きな役割を果たして下さいました。彼女のおかげで、今回の話が、まとまったのだと感謝しています。また、彼女には、今後とも協力していただけるようお願いしています。彼女の大阪での3年間の ALT としての経験は、私達の教材作成作りに貴重なものになることは、間違いないと確信しています。



釜山市教育委員会にて

左より、金 智賢さん、李指導主事、辻岡さん、藤澤

4日早朝、釜山からソウルに移動、稲川先生が、知り合いから教えてもらった、教師の組合を訪れ、その英語教師のホームページに私達のセミナーへの参加依頼文書を掲載して戴くことをお願いして来ました。このことに関しては、このプロジェクトの最初から、本当に親身になって御協力を戴いている、張さんが同行してくださり、韓国への先生方に熱心に説明をしていただき、現在その掲載を検討していただいているところです。

4日夜、6時30分からソウル市明洞（ミョンドン）の世宗（セジョン）ホテルで、大阪の韓国領事館の金領事に紹介していただいた、Choi Sung Kong（チェ サン コン）指導主事とお会いすることが出来ました。その場には、ソウルの我々の友人である、Kwon Young Hee 先生、李 龍宰先生も同席してくださり、有意義な話し合いを持つことが出来ました。その場には、チェ先生が連れて来てくださった英語の先生、李先生が連れて来てくださった日本語の先生も加わり、現在の進展状況、これからの流れ等について、説明をさせていただき、協力をお願いしたところ、快く協力を諒解していただきました。ソウルからは、英語、日本語の教師をあわせて10名程度推薦していただけることになっています。チェ指導主事自身も予定がなければ、参加していただけることになっています。そして、世界は狭いもので、偶然にもチェ指導主事と Young Hee さんが、以前教材と一緒に作ったことがあると言うことで、そのことが話をよりスムーズに進展させることになったと思います。

5日は、もう帰国するのみと、思っていたのですが、李 龍宰先生が、知り合いの娘さんの結婚式に招待されていると言うことで、幸運にも一緒に結婚式に最初から最後まで出席させていただきました。

新婦のお父さんが、大阪の金剛学園（韓国人のための中、高等学校）で教鞭を取っておられたと言うことで、快く、写真を取ることを諒解していただき、親戚以外あまり見られない儀式まで、写真やビデオを撮らせていただきました。

いずれ公開できると思いますので、こちらの方も楽しみにしててください。

今回の打ち合わせツアーを振り返ると、今後の教材作成作業の準備を始めるのに、大切な話し合いの第一歩を良い方向に踏み出せたのでは、と思っています。

今後は、塚本、山本さんを中心に教材作成プロジェクトの話し。ホームステイについては、稲川さん。その他にも東京の岡田さん、広島の道面さん等も参加してもらい、井川顧問統括のもと、より綿密な話し合いに入っていくことになります。

まずは、有意義な話し合いを持てた御報告まで。

韓国随行記

辻岡尚子

今年の春は、旅づいていた。というのは、3月25日から31日がチャータースクールツアー参加。4月1日と2日は出勤して新学期の準備。4月3, 4, 5日には、ECAPの藤澤氏のお供をして韓国にと2泊3日の旅。韓国でも桜が多く美しかったが、明るい昼間に見ることが多かった。そのせいかもしれない。桜の花を求める気持ちがいつもより強かった。私にとって一番美しい桜とは、少し肌寒い、幾分湿り気のある夜の空気のもとに薄ぼんやり咲いている桜だ。だから、韓国から帰国して、すぐに花見の宴に参加した時には、花見酒で盛り上がる人々をしりめに、これが日本の桜だと静かに思った。それから桜がとうとう散るまで、毎日仕事帰りに公園に立ち寄り、夕闇迫る時刻に桜を眺めて過ごした。日本の桜をこんなに意識させられたのは初めてで、それはこの時期にいくぶん日本を離れて、じわりとそして何となくだが自分が日本人であることを意識させられていたことと、不惑を目前に控えた自分の年齢的なものが相まっているのかもしれない。チャータースクールのツアーについては報告集で読んで貰えたらいいが、韓国への旅で感じたことを少し書いてみようと思う。

私自身は韓国はアクロスアジアツアー以来2度目だ。しかし、前回のときに、言葉が通じないこと、看板もハングル文字だけでさっぱり読めないことのせいか、自分が地名を全く覚えられないことだけは強烈に印象に残っていた。今回は藤澤氏とたった2人であちこち行かなければならないけれど、氏とはぐれて迷子になったらどうしようと思っていた。しかし、それを吹っ飛ばしてくれるきっかけとなることがあった。

ソウルについて早々に、通訳してくださる人なしで、ある場所へ約束の時刻に行かなければならないことになった。しかも、スーツケースを抱えて。言葉が通じないことの歯がゆさと土地勘のない不安を感じながら、重い荷物をひきずり、通りすがりのオモニに道を尋ねた。言葉が通じず、身振りだけで道を教えてくださったのだが、つかず離れずといった感じで私たちの後をついてきて、すこし違う道へ行きかけたら、違々と身振りで教えてくださった。そのあとも、「アニョハセヨ」と韓国風地名の発音だけで、何回か道を尋ねて、なんとかその場所にたどりついた。皆、大丈夫かとやや離れて見守ってくれていた。この時受けた好意が、その後2日間のソウル生活も、迷子になっても「なんとかなるさ」という気持ちにさせてくれた。「ソウルだったらどこでもひとりで行けるかな」という楽観を得た。よくよく考えてみれば、アジアツアーでも自由行動といえ、数人で行動することがほとんどで、いつもだれかまめな人が下調べをしていて、連れて行って貰っていた。自分の性格のせいでもあるから、これからもあまりそれは変わらないと思うが、たまにはまめになるべきだと反省した。

もう一つ強く感じたのは、ECAPのツアーは本当によく準備しなければならないということだ。ソウルでの最終日、お世話になった李先生に韓式のうなぎ定食をごちそうになった時(こちらがごちそうするつもりが結局ごちそうになったのだが)、先生は、低い声で自分に言うように「(日本と韓国は)本当の交流をしなければならないですよ」とおっしゃった。長年日本に住み、教育に携わってこられた方が、ぼつりともらされた一言に身が引き締まった。自分たちがその国を訪れて、人々と交流し、いろんな場所を訪れて「いろんな考えがあるんだ」と報告書に書くレベルでは終わることはできない。意見が異なることがあれば交渉して、調整し、自分たちの理解したことを、互いに納得できるようなかたちで教材に作り上げないとならない。大変なことだ。頭ではわかっていたつもりだが、李先生のような方のひとことに心がふるえた。同時に、やりがいのあることだ。そして、韓国では、コンタクトパーソンはもちろんのこと、「そういうことなら、へいってみたらいい」と広がってゆく、縁としかいいようのない偶然のつながりと、忙しい時間を割いてつきあってくださる人の厚意が、私たちのツアーをつくっていくのだと思った。

ECAP 2003 Korea 東京支部学習会報告

岡田かおる

学習会概要

日時 : 3月29日(土) 20:00~22:00

場所 : 千葉県柏市 麗澤大学構内研修寮

講師 : 朴賢淑(パクヒョンスク)氏

参加者 : 藤澤、大竹、佐藤、志村、阿部、岡田、富永、吉本屋、宮城、増田、
新谷、藤林、関根、土屋



3月29, 30日におこなわれた支部合宿に合わせて、ECAP 2003 Korea に向けての学習会を行いました。志村さんからの紹介で、時事女性週刊誌の記者である朴賢淑氏を講師に迎え、韓国の近現代史、日本とのかかわりなどを中心に日本語でレクチャーをしていただきました。朴氏は1956年、珍島生まれ、1984年に来日、日本人と結婚し、日本で生活して19年、日本では仕事や活動を通して、韓国と日本の橋渡しの役割を精力的になさってきた方です。



29日の夕食から参加していただきましたが、朴氏の率直な物言いと活力溢れる話し振りに、一同即座に引き込まれることになりました。朴氏が来日後関わった従軍慰安婦の戦後補償問題の運動について、また、「長い目で見れば短い36年とも言える訳ですが、」との前置きで、1910年から1945年の光復節まで、そして現代に至るまでの韓国事情について話していただきました。

朴氏の話から特に私が印象に残った2つを挙げます。ひとつは、「人間は誰でも、好きでその国に生まれたわけではない。好きで、韓国人に、または日本人に生まれてきたのではない。日本人だから韓国人に謝罪しなければならない、ということはやめてほしい。私たちは謝ってほしいわけではない。ただ、事実を知ってほしい。事実を知ることが大事であり、若者も知る権利があります。」もうひとつは、朝鮮半島と日本の地図を逆さにして私たちに示したことです。「こうして見ると隔てる海がまるで湖」、「まだ国家というものがない時には人は自由に往来していた」と、古代の話にも触れられました。

質疑応答も含め10時過ぎまで会は続き、最後に「韓国を、韓国人を楽しんでください。」と夏のセミナーへの励ましをいただきました。

韓国に対し、漠然と負い目を感じていた私にとって、今回の学習会は新たに二国の関係を考えるきっかけとなりました。今、私たち、若い人を教える中学や高校の教員として、できること、しなければならないことは何かを考え、夏のセミナーを通して少しでも実行していければと思いました。

“チャータースクールツアー2003” 帰国報告

チャータースクールツアー2003 実行委員会 中 川 房 代

「チャータースクールツアー2003」は、3月25日～31日5泊7日の日程で行い、参加者7名、全員無事に、元気に帰ってきました。

直前のイラクとの開戦の影響で、空港や街中での厳重な警備も心配されましたが、何の問題もなく、全てのプログラムをスムーズに予定通りに実施することができました。2つのチャータースクールへの訪問と日本紹介のミニレッスン（書道、珠算、折紙、たこ焼き、日本の学校生活の紹介など）、ホームステイなど、本当に充実したツアーとなりました。

現在、ツアーの報告集を作成中です。5月末の報告会でお披露目をする予定です。また、ツアーの報告ビデオも編集に着手しました。2つのチャータースクールの学校の様子や校長先生へのインタビュー、ニューヨークのグランド・ゼロ訪問など、盛りだくさんでとても内容の濃いものになると思います。こちらもお楽しみに！

もう1つ！ Collegium Charter School では、地元新聞の記者の取材を受けました。先日、その記事が写真付で掲載されたそうです。記事を手に入れましたら、お知らせしますね。

実施行程

3月25日（火）朝 出国

午前中：ニューヨーク着

EIRC(Educational Information & Resource Center)訪問

<フィラデルフィア・ホテル泊>

3月26日（水）Community Academy of Philadelphia 訪問

日本紹介のミニレッスン

<ホームステイ>

3月27日（木）Collegium Charter School 訪問、日本紹介のミニレッスン

<ホームステイ>

3月28日（金）テンプル大学教育学部訪問、ニューヨークへ移動

<ニューヨーク・ホテル泊>

3月29日（土）グランド・ゼロ訪問など

<ニューヨーク・ホテル泊>

3月30日（日）ニューヨーク出発 —— 3月31日（月）夜 帰国

編集後記

チャータースクールツアーに出発する直前、新設の単位制の高校への転勤が決まりました。新しく学校を造っていくとはどういうことなのだろう、どんな問題に遭遇するのだろう、などと暢気に考えていたら、実際に自分が体験することになりました！この偶然も、新たな自分へのチャンスの扉なのだと思います、元気に新しいステージに進んでいきたいと思います。春は、スタートの季節ですね。(塚本美紀)